

私という運命について

白石 一文

直木賞作家の著者。話題の著者の本を手にとったのは、本の後ろにあった「一人の女性の29歳から40歳までの」揺れる10年」を描いた」という一文に惹かれたからでした。時代背景から、私が生きてきた時代とも重なり、どのように一人の女性の生き方が書かれているんだらうと、興味津々で読み始めました。

主人公は、男女雇用機会均等法が施行され、女性総合職第一号として大手メーカーの営業部に勤務する冬木亜紀。10年という歳月の中で、亜紀が体験した仕事、恋愛、結婚、出産、家族、そして死・・・紆余曲折の人生が描かれています。はじめは、亜紀が経験した事柄「小説の中の特別な出来事としてドラマティックに描かれていると思っていました。しかし、何ひとつ特別なことは書かれていない、ということに気づいたとき、何かが私の中ですつきりしました。亜紀が香港で経験したことは、誰かが大阪で経験しているかもしれないし、恋人との別れは、女性だったら誰でも経験することであるだろう。経験している場所や背景の違いだけで、同じ思いや決断はきつと誰もがしているんじゃないか、と。一生懸命に生きることは、毎日の生活の中の小さな出来事を「まあ、いいか」ではなく、丁寧に過ごすことじゃないか、と思うことができました。特別なことと思うからしんどいなあ、と思うし、先のことばかり考えるから疲れる。日常の小さなことを大切に丁寧に生活してみよう、そう思うと、どこかワクワクしてきました。

C・Y・



角川文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞